

## 悪童ワルガキ小説寅次郎の告白



大好きな俳優だった渥美清さんが1996年8月4日に亡くなり、早いもので23年になる。あのとき、名古屋市立女子短大の研究室で、隣の部屋の同僚・森正さんから渥美さん訃報を聞いた。驚くばかりで、ショックであった。

渥美さんと言えば、「寅さん」である。確か信州大3年のとき、松本城近くの映画館で「寅さん」に出会い、ずっと通い続けた。テレビでも何回も見えてきた。大学院時代、短大に就職してからも、いつも「寅さん」の主題歌を披露した。歌の前に「私、生まれも育ちも、葛飾柴又です……」という台詞をつけて。当時は学生さんにも「寅さん」は知られており、しつこいほど宴会で歌っても「もう、えんかい？」という声は聞こえてこなかった。

そんな「寅さん」の小説が、写真のように刊行された。著者はもちろん山田洋次監督である。本書の冒頭と最後を紹介したい。

私、生まれも育ちも東京は葛飾柴又でございます。姓は車、名は寅次郎。昔の仲間はフーテンの寅という仇名で私を呼びます。

生い立ちを話せとおっしゃられてもねえ。どうってことはないんですよ。しょうもねえ悪ガキが場末の街で馬鹿なことばかりしてナリだけデカくなったという、つまらぬえお話しです。お酒ですか？ いただきます。酒の力でも借りなきゃできませんよ。思い出話なんて。

しんしんと雪の降る静かな真夜中だと思ってくださいまし。柴又帝釈天の参道の中程にある私の実家の古ぼけた団子屋、その軒先で赤ん坊の泣き声がする。家の者が戸を開けてみて驚いた。雪の中に籠が置いてあり、その中に布団にくるまれた赤ん坊が腹を減らしてピーピー泣いている。じつはそれが私なんでございますよ。

千里山にあのでかい奇妙きてれつな「太陽の塔」というのが建った大阪万博の頃でしたか、ときどき故郷のことを思い出すようになってきた。やはり心の弱りとでもいうことでしょうかね、お客さん。今頃柴又はどうなっているのだろうか、両親を亡くした妹、たった一人の俺の肉親のさくら、あいつはそろそろ嫁に行く年頃のはずなんだけどいつたいどうしているのだろうか、悪い男に騙されて泣いていたりするんじゃないだろうか。そんなことを思うとなんだか矢も盾もたまらなくなってきたね、ある日足を向けたんですよ、東京は葛飾柴又へ。20年ぶりでした。ちょうどその日は年に6回の庚申のお祭りの日でしたね、普段は寂しいあの街はいっぱいの人出でした。

(2019年8月18日)